

さわやかに たからかに とこしえに

秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校 校長室だより第3号
2020年6月18日(木)発行 文責 信田 正之

逆境の定期戦に感じた誇りと絆

新型コロナウイルスの影響で、今、学校では様々な行事が中止や延期を余儀なくされています。しかしそんな中、半世紀以上の長きにわたって本校の母体校である横手工業高校と横手高校が継承してきた「野球定期戦」が6月11日に、「グリーンスタジアムよこて」を会場に開催されました。「こんな時期にやっているのか・・・」と疑念を抱く人もいるでしょう。正に「逆境の定期戦」と言えます。でも、私は最後まで「この行事はやるだけの価値がある」と信じていました。

定期戦を開催するにあたっては、見えないところで多くの苦労がありました。感染防止対策はもちろんですが、国や県の方針に従い、入場できる範囲を選手、吹奏楽部員、応援生徒、引率教員、保護者2名までとし、両校合わせて200人に限定しました。野球部保護者会の皆様には、入場をご遠慮いただいたことを心苦しく思っていますが、「生徒ファースト」の趣旨をご理解のうえ、ご協力いただいたことに、心から感謝申し上げます。また、当日は天候が思わしくなかったため、試合開始時間を急遽変更しました。無理なお願いに快く対応いただきました審判の皆様、雨の中でもグラウンド整備に尽力いただきました球場の皆様にも感謝の念が耐えません。

さて、開会式のあいさつで、私は「定期戦は両校の誇りと絆を喚起する学校行事であり、その心があればどんな困難も乗り越えられる」と述べました。そして、その「誇り」と「絆」は生徒の心に確実に育まれたと私は実感しています。特にそれを強く感じたのは、試合が中盤にさしかかったころです。途中から雨脚が激しくなり、本部では「生徒の健康が心配だから応援団は学校に帰そう」という話になりました。ところが、雨に濡れても何のその、両校の応援団から「最後まで応援したい」と訴えてきたのです。自校の勝利を信じ、誇りを持って選手を励まそうという機運が高まっている証拠です。その気持ちに動かされ、両校応援団をバックネット裏の雨の当たらないところに移動させることにしました。本部席から応援席は見えませんが、応援がヒートアップしてきたのは声の大きさに分かります。そして何より、両校応援団の距離が近づいたことで、心の交流も芽生えたに違いありません。閉会式の生徒会代表あいさつで、横手高校の生徒が「定期戦で芽生えた絆を大切に両校が力を合わせ発展し続けることを望む」という趣旨の話をしてくれたことから、それは明らかです。私は、自分の言葉を理解してくれた生徒がいたことを嬉しく思うとともに、これからも両校が定期戦を通して強い絆で結ばれ、互いに切磋琢磨しながら成長し続けていくことを願わずにはられませんでした。

定期戦のあと、両校の選手、応援団の生徒の表情は、勝ち負けの区別なく皆、「やりきった」という満足感に満ちあふれていました。それはとりもなおさず、心に湧いた「誇り」と「絆」が、「逆境の定期戦」という困難を乗り越えたことを確信した表情であったに違いありません。皆の表情を眺めながら、私は「やはりやってよかった」と、心の中でそうつぶやいていました。